

審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2828 号	氏名	時任 高章
審査担当者	主査	赤木 由人	(印)
	副主査	長藤 宏司	(印)
	副主査	高森 信三	(印)
主論文題目： Efficacy of bevacizumab-containing chemotherapy for non-squamous non-small cell lung cancer with bone metastases (骨転移を有する非扁平上皮非小細胞肺癌に対するベバシズマブ併用化学療法の有効性)			

審査結果の要旨 (意見)

肺癌は診断時点で既に進行しその治療方法が化学療法しかない場合が多い。その為効果的抗腫瘍薬の選択が求められる。特に骨転移を有するとその予後は極めて不良である。それに関連する症状はQOLも低下する。この点で血管新生阻害剤である「ベバシズマブ」は「プラチナ」との併用により治療効果の向上を動物実験では確認され臨床でも認識されている。しかしこの点で臨床データがある。本研究は後方視的検討であるが、骨転移を有する非小細胞肺癌の非扁平上皮癌 25 例について、ベバシズマブの上乗せ効果を証明する貴重な報告である。今後このデータを元に臨床で実施されるであろう前向き試験の基礎となる研究と考えられる。

論文要旨

骨転移動物モデルにおいて、VEGFR を標的とした治療は有効性を認めているが臨床的には未評価である。そこで VEGFR 抗体であるベバシズマブの骨転移に対する効果について、2007-2011 年に静岡がんセンターでプラチナ併用化学療法+ゾレドロン酸で治療を受けた、骨転移を有する非扁平上皮非小細胞肺癌患者 25 例について、ベバシズマブ併用群 13 例 vs. 非併用群 12 例に分けて後方視的に検討した。病変全体の奏効割合は 54 vs. 8% ($p = 0.01$)、病勢コントロール割合は 100 vs. 50% ($p = 0.01$)、骨転移巣に限定した奏効割合は 23% vs. 0% ($p = 0.01$)、病勢コントロール割合は 100% vs. 50% ($p = 0.01$) で、いずれもベバシズマブ併用群で有意に良好であった。骨転移巣に関する TTP 中央値は 13.7 vs. 4.3 ヶ月 ($p = 0.06$)、病変全体としては 5.7 vs. 2.6 ヶ月 ($p = 0.17$) と有意差を認めなかった。SRE の発生割合は 23 vs. 50% ($p = 0.16$) であった。ベバシズマブ併用化学療法は病変全体及び骨転移巣に対する抗腫瘍効果、骨転移巣の TTP を延長する効果、SRE の発生を減少する効果を有する可能性が示唆された。